

大学入学者選抜における英語4技能評価及び記述式問題の扱いについて —実態調査の結果からみたいくつかの論点—

筑波大学 清水美憲

1. 入学者選抜の持続的な改善のためのモニタリング調査の継続

昨年7月から9月にかけて実施された実態調査から、英語4技能評価及び記述式問題の扱いを中心に、設置者の違いや大学・学部固有の状況の違いに由来する入学者選抜実施の多様な実態があることが明らかになった。このような個別入試が全体としてどのような状況にあるかをモニタリングすることは、政策上非常に重要である。また、このような実態調査から得られるデータに基づいて、今後も入学者選抜の持続的な改善が図られることが望ましい。

それゆえ、このような実態調査を、恒常的に調査する項目や特定の面に絞った項目の設定を含む形で継続的に実施する仕組みを導入してはどうか。併せて、各大学や学部における優れた取組と特徴的な取組などの情報を集めて共有する仕組みを構築してはどうか。

2. 大学入学者選抜における英語4技能評価における3ポリシーの連動性の明確化

入学者選抜がその役割を十全に果たし、大学と学生との望ましいマッチングが図られるためには、各大学が3つのポリシーを具体的かつ明確に示し、その連動性を強化することが極めて重要である（第22回会議、資料1）。この点を、特に英語4技能評価の実施との関係において再確認したい。毎年度行われる大学入学者選抜は多様であり、実態調査から明らかになった通り、実施主体の大学・学部の規模や分野等による差異も大きい。ため、DP・CP・APの間のリンクを「見える化」するためにガイドラインを見直し、各大学の協力を求めてはどうか。

大学卒業後における総合的な英語力の必要性については様々な意見があり得るが、各大学が社会的なニーズを踏まえ、「出口」段階でどのような総合的な英語力を求めるかをDPとして具体的示した上で、それがカリキュラム構成にどう具体化され、またそれらを踏まえたアドミッション・ポリシーがいかに設定されているかを、外（受験者、高校関係者、他大学関係者、広く社会）から見えやすくすることが望ましい。英語の問題にのみ特化することではないかもしれないが、この観点から、英語力育成・評価に関するDP・CP・APの関係を点検し、明確化することを各大学に求めてはいかがだろうか。

3. 入学者選抜における記述式問題出題の促進の方策

入学者選抜における記述式問題の出題の意義や必要性については、一定の共通理解が得られている。また、本検討会議では、大学入学共通テストへの記述式の見送りの段階で指摘された課題の確認を踏まえ、当面、個別入試において記述式問題の出題を充実する方向で議論が進んできた。一方、調査結果からは、国公立大学と私立大学とで「個別入試（一般選抜）で記述式を充実すべき」という意見に差異が見られること、選抜単位によっては記述式の問題による評価を経ずに入学する学生が一定の割合で見出される実態も浮かび上がっている。

数学については、大学入学共通テストで記述式問題を出題することのねらいや、限定した形であっても数学の「表現力」を評価することの意義も理解できるものの、採点システムに関する社会的コンセンサスや受験を取り巻く文化の変容、CBTの導入やAIの採点など環境が整うまでは導入が難しい。今回の提言では、個別入試での記述式問題の充実を重視する立場から、上記1のようなモニタリング調査を活用した参考となる好事例（Good Practice）の抽出やそれに対するインセンティブの付与等を推進方策の基本とするのが望ましい。